

# 令和元年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・パネルディスカッション・質疑応答

著者	山口 正章, 川口 高風, 菅原 研州, 尾? 正善
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	25
ページ	49-63
発行年	2020-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1646/00000859/">http://id.nii.ac.jp/1646/00000859/</a>



## パネルディスカッション・質疑応答

司会…それでは定刻となりましたので、再開させていただけだと思います。パネルディスカッションと質疑応答ということで、40分前後をめどに行わせていただければと思います。このパネルディスカッション・質疑応答の司会は大本山總持寺副監院でいらっしやいます、山口正章老師にバトンタッチをさせていただきます。よろしくお願いたします。

山口老師…皆様こんにちは。今日をご参加いただきましてありがとうございます。ご紹介いただきました總持寺の山口でございます。それではこれからパネルディスカッションを開始させていただきます。まず、三人の先生に今、御発表いただきましたけれども、発表した後で、少しことが言い足りなかつたな、あるいは補足したいなということもあるようでございますので、お三人方に4〜5分程度で、まずその話を御一人ずつお願いたします。では、最初に川口先生、よろしくお願いたします。

川口先生…私は名古屋の話から、禪師の伝記、両山分離問題、總持寺の鶴見への移転、著書、弟子などのお話をさせていただきますました。御質問があつたようですけど、どうして名古屋から石川禪師が出たかということですね。簡単に言えば、名古屋という信仰の篤い地域に育つた方からです。名古屋は、先ほどお寺が多いと言いました。また、

お坊さんも必然的に多い、それは信仰心も篤く、お坊さんを大切にしています。お葬式とか法要だけでなく、月参りという、月経が盛んに行われています。特に明治期には御授戒会、因脈会が盛んに行われていました。だから名古屋の坊さんはお経が上手といわれます。

施食会は、一座にまとめてやっているところが多いようですが、名古屋では一軒一軒やらないとお施主さんが納得しません。しかし、近年ではそれがかわってきまして合同で行うことも行われるようになりました。月参りも真宗に対抗して布教化のために行われたものです。以前は、今日はおじいさんの命日、何日はおばあさんの日、お父さんの命日というように、月に何回も行っていました。お布施は少ないのですが、亡くなった一人一人に供養を行うのです。最近新しい仏様の命日のみにまとめさせていただいていますがお寺さんに何度もお経をあげてもらうことが、それはありがたいという信仰の地であったんですね。

したがって、石川禅師を始め多くの高僧が輩出しましたけれども、布教に努める無名の月経坊主、葬式坊主ともいわれる用僧専門の人も多かったです。そういう人がいたからこそ多くの高僧も出たと思われれます。

山口老師…はい、ありがとうございます。それでは次に菅原研州先生、よろしくお願いいたします。

菅原先生…石川禅師の御授戒の作法や説戒については、『戒会指南記』や「仏戒略説」に基づいてお話ししました。そこで、明治時代当時、宗門が授戒中心の布教をやっていたことの一歩象徴的なものとして、本来は『修証義』を挙げるべきでしたが、今回は挙げませんでした。『修証義』は当初、『洞上在家修証義』が布教組織である「曹洞扶宗会」で作られ、その後、同会が宗務局に吸収される際に『曹洞教会修証義』と改編されて今の形になりました。最初の『洞上在家修証義』を編集したのは大内青巒居士という人であり、青巒居士と石川禅師との関係については、

現段階ではなかなか出てきません。ただし、石川禅師が鶴見で晋山式を修行された際に、青巒居士は「居士疏」を奉っています。また、青巒居士が亡くなった時、今は永平寺の別院になっておりますが、東京の麻布長谷寺で葬儀をされた時の乗炬師は石川禅師でした。そうしたこともあって、石川禅師と青巒居士の関係は、おそらく並々ならぬものがあつたと思うのですが、この辺の詳細について解明出来ておりません。なお、石川禅師の著作『獅子吼』では、当時の宗門の教化について論じられた際に、『修証義』と直接明言されないものの、「四大綱領」に関する教えが残っていることもあって、関心などはあつたと思います。

山口老師：はい、ありがとうございます。では最後に、尾崎先生、お願いいたします。

尾崎先生：私の言い足りなかったことは、石川禅師の御生涯の中で、年譜を後で見えてくださいというお話をしました点です。確認をさせていただきたい点が、何点かあります。まず、いくつかの任職地があつたというのとはわかつています。更に、明治五年から六年の教部省の項目で、政府が「三条の教則」というものを基本にしながら国民を指導していく、教育していくという時、明治六年から教部省の訓導という職、要するに教師に任命されて政府の方針を説いていくということも行っております。それから明治十二年と十六年、曹洞宗専門学校の学監を拜命及び曹洞宗大学の学監を拜命するとあります。これは先ほども言いましたけれども、現在の駒澤大学につながる学校の学監という要職を御勤めになるということです。

次に、川口先生も仰っておりますが、本山で監院になるのが次の年、四四歳のことです。そしてその次に彦根の清涼寺住職、それから明治二十九年には世田谷の豪徳寺、そして明治三十四年には大雄山最乗寺住職ということ。宗門の本当に主要な寺院の任職になる、さらに大学のトップというようなこともお勤めになる、最終的に禅

師になられるわけです。

それからここには書いてありませんけれども、多くの著作も残されました。そして、菅原先生が発表なさったように、授戒会も行う。本当に、石川禅師とは一人だったのか、というくらい学生の指導もし、本山を再興し、著書も著わし、授戒会という形で一般の布教化もするという、スーパーマンと言いますか、そういった活躍をなさったのです。

この年譜一つを取り上げても、石川禅師の足跡の大きさというものを確認できるのではないかとということを繰り返し申し述べ、私の話を終わりたいと思います。

山口老師…はい、ありがとうございます。それでは、質問票について、皆様たくさん質問をお書きいただきました。まことにありがとうございます。先ほど休憩時間中にお三方の先生方に見ていただきました。皆様全員へお答えすることは難しいのですけれども、いくつか選んでいただきましたものを、私が代わりに読ませていただきます。まず、川口先生、「名古屋に生まれ育った石川禅師が總持寺分離独立において活躍された旨がよく理解できました。禅師の活動の原動力および政治力は名古屋の文化が関係していると考えますか。それに関連してですけれども、永平寺系の人材を總持寺系にコンバートしたのは若いころ永平寺における二祖国師六百回忌の時、監院寮の中書記時代のことや、あるいは能山の、両本山の分離独立問題における立場とも関係があるとお考えでしょうか」これに關しまして、ちょっとお願いいたします。

川口先生…まず、尾崎先生も名古屋のことばかり言われますように、名古屋は信仰の篤い所で、一族から一人出家すれば九族天に生ずということから、出家者を出した所です。つまり仏さんのことにはお金を出したのでしょうか。

信仰の篤い所ではないでしょうか。

そこで、名古屋の財閥、大商人などが支援したのですね。しかも、みなさんは曹洞宗のお寺の檀家さんですね。それからもう一つ、私が言わんとしたことは、一番目の伝記で、行実をはじめいろいろな伝記資料はありますが、わざわざ『曹洞宗全書』からピックアップアップしたことです。それに細かな点を追加していけばよいのですが、あえて入れなかったのは、石川禅師の明治元年より同十二年ごろまでの事が、一切、紹介されておらず、記事がなかったのです。これはびっくりしました。以前、永平寺の一華蔵に入って白鳥鼎三らの資料を探していたら、鼎三による『光明蔵三昧』の刊行の事務的なことや監院寮の中書記を勤めていたことなどを知りびっくりしました。また、石川禅師は能筆家で、先ほど尾崎先生は読めないとおっしゃったけれども、私もなかなか読めずにいました。独特な字ですね。書記ですから石川禅師の書いたものがかなりあったように覚えています。石川禅師は事務的に秀でた方と思いました。

ものすごく字も堪能、それは、江戸時代に今のような学校はなく、叢林でいい師家について学ぶ、それが学問であり、禅宗坊主は、叢林での修行を中心とする行学一如の考え方があったようですね。石川禅師も、清涼寺長森良範の下でバンバンと叩かれて、修行したものと思われれます。

明治期になって永平寺より総本山論が出てきました。そのため總持寺側は反対するなどしていましたが、輪住制をとっていたため、明治政府より代表となる責任者の住職を求められ、独住制をとることになり、独住一世として旃婁堂禅師が就きました。その奕堂禅師に事務的力を育てられたのが滝谷琢宗禅師です。滝谷禅師は、大雄山最乗寺の住職で總持寺系でありましたが、両本山の選挙制度の関係で永平寺の住職になりました。その滝谷禅師も事務的なものがものすごく堪能でありました。石川禅師は滝谷禅師に事務的なことを習ったのです。奕堂、滝、谷、琢、宗、石川素重という系列があるような気がします。また、石川禅師を取り上げるのに、永平寺の一華蔵に眠っている資

料が有ると思います。禅師の明治初期時代を調べなければ、永平寺蔵の資料も見るべきかと思えます。当時の長森良範監院に呼ばれて行ったため資料があるものと思えます。

明治中期に相撲の番付と同じように、お坊さんとか、お金持ちなんかを東西に分けてリストした番付を作ることがありました。銅版刷や活版刷で刊行しているのです。その中に「現今緇流龍象一覽」という、明治二十年頃のお坊さんが宗派問わずにあげられており、また、在家居士も取り入れられて、番付を作っているのです。その人の評価されている特徴を挙げています。

それに石川禅師は出ていますが、「事務名望家」、事務が堪能だということが出ています。また、明治二十六年一月に発行された『現今洞上僧侶檀信三十名家投票開緘調査結果一覽表』は、当時のお坊さんの特徴を投票しているのです。ただ、どういう方が投票したのかは不明ですが、それをみますと、石川禅師は、「宗政」という、宗務行政の項で、一〇八点のナンバーワン、それから、「宗務」、宗門の事務部門では四八点のナンバーツーなのです。また、「事業」、すなわち事業家として捉えた部門では五四点のナンバーワンです。そのため当時の人は、石川禅師のことを宗政家であり宗務家であり、總持寺の鶴見移転前から事業家としても、人物評価されていたということなのです。

質問に対して答えになったかわかりませんが、以上です。

山口老師…はい、ありがとうございます。先生が今おっしゃいました、滝谷琢宗禅師も大雄山の住職で、總持寺の監院をしてから、永平寺へ行かれた。実はお墓も總持寺にありまして、以前は月忌があつて、祖院でも真晃斷際禅師、滝谷琢宗さんの、永平寺の禅師さんの月忌をわれわれは行っていたのです。今は事情があつてやめてますけれども、そのお墓も青山墓地にあったのを、あまりにも誰も面倒見ないから、孤峰禅師か誰かがそれを譲り受けて本

山の一角にお墓を建てたと。やはり、石川禪師との見えない関係がこうやってあらわれてきているのかなと思いますね。

それから長森良範という方、後に總持寺の西堂で、宝物殿にその掛軸が残っております。そういう意味では、両山、今と違って割と自由に行き来していたのではないかなと思います。

それでは次に、菅原研州先生への質問を読み上げます。「教化、いわゆる布教の基本に授戒会が据えられ、数多くの授戒、御親化をされたことに驚きました。韓国や台湾まで行かれておられます。授戒を行う寺の選択は禪師さまがご自身で行ったのでしょうか。それとも、石川素童禪師の優秀な弟子たちがセレクトしたのでしょうか」この点についてよろしくお願いいたします。

菅原先生…普通に考えれば、当時の規則から言いましても、禪師さまの御親化には宗務局への届出が必要ですので、届出を受けた、つまり、拝請を受けるという形で、順番を決められたのだろうと思います。しかし、当時は徐々に便利になりつつあるとはいえ、移動には制約が残る時代でもあります。よって、御親化をされる寺院の選択に関しては、全国からご希望がある中で、特に御縁の深い寺院を選びながら授戒会の戒師を行われたのだろうと思います。私自身、この表を一回作って、その中で特に有名な寺院の有無を見てみたのですが、各地域における大寺が多いという印象があります。当時から経済力を含めて、地域において有力な寺院でないと、禪師さまを拝請して授戒会を実施することは難しかったのだらうと思います。また、御本山に極めて近い直末寺院などを随分と廻っておられる印象もあります。よって、具体的な選択方法については、推測を重ねるしかないところもあります。やはりその年ごとか、一年を前後半くらいに分けて。特定の地域に行くことと決めたならば、そこから移動する状況で、授戒会を希望される各寺院を入れ込みながら移動されていたと思います。



山口老師…はい、ありがとうございます。本当に、現在でも、御授戒は大変な準備とかがありますが、菅原先生、今の禪師さまは、御授戒での随行は三〜四人ですが、この当時はどうだったのですか、一座みたいな随行者はおられたのでしょうか。ちよつと私からの質問でありますけれども。

菅原先生…随行の方はおられたと思います。江戸時代の授戒作法書を見ましても、室侍、今でいうと室侍長と言いますでしょうか、その方の位置づけがかなり大きいものがあります。現在では三師として、戒師・教授師・引請師が当たり前ですが、当時は序列的には戒師・教授師・室侍という風に名前が挙がってくる状況でしたので、室中の主たる方々を同行して移動していたと思います。

山口老師…はい、ありがとうございます。では次に、尾崎先生に御質問させていただきます。「資料の中に、織田雪巖監院老師の名前がありましたけれども、この織田雪巖監院さんについてどのような方であるのか。石川禪師を中心に、どのようなサポート、働きをしていたのか、そういうことを少し教えてください」ということです。お願いいたします。

尾崎先生…私も織田雪巖師について特別詳しいわけではございませんけれども、石川禪師の元にあつて、監院という要職、本当に本山移転を含めて、再建の実務を一手に引き受けた方だと思います。大雄山最乗寺の住職もお勤めになられておられます。ですから、石川禪師の経歴から考えても、御存命であれば、長生きされておられたら禪師さんになられていた方ではなかったかと思いますが、石川禪師より先に遷化されました。非常に能筆家、字の素晴らし

い方でございます。石川禪師の字は非常に特徴的でございますが、織田監院の字は大変読みやすいというのが私の率直な感想でございます。この程度でよろしいでしょうか。失礼いたしました。

山口老師…はい、織田雪巖監院さんは私たちも毎朝の入祖堂のところで雪巖不白と号を唱えています。本当は織田不白と、不可の不に白いと書いた号を名乗っています。当時の功労者で長生きすれば多分猊座に上っていた方です。ちよつと早くに亡くなりましたが、名前が残っております。はい、ありがとうございます。

もう少し時間もございます。ではまた、二順目ということで、川口先生の方へ。「名古屋に寺院が多い理由はご説明いただきましたけれども、宗教行事によつて信仰心が強化されたとおっしゃいましたけれども、土地と関連深い行事が修行されてきた痕跡はあるのでしょうか、多いのでしょうか」

川口先生…名古屋だけ特別にこういうことをやっているということはないと思いますが、お正月には大般若、二月になれば涅槃会。三月には、お彼岸、四月には降誕会、それから五月、六月は無いですが、七月もなくて、八月にはお盆行事として棚経から施食会、九月には秋の彼岸会、それから十二月には成道会という行事を行っています。その他、地元の学区や区の仏教会で、曹洞宗だけではなく通仏教的な名古屋市仏教会、愛知県仏教会でも、行事が綿密に行われていますね。そして仏教会での行事は宗派問わずのため、禅宗系の読経は般若心経と観音経とか。真宗系の人は、「正信偈」「阿弥陀経」などを読誦する二部構成でやっています。したがって、これは特別行事というのではなく、当然の行事ということをやっております。今でこそ御授戒会はあまり行いませんが、古風を慕うというのでしょうか、昔からの伝来の仏教行事を勤めているのが名古屋でしょうか。

山口老師：はい、ありがとうございます。では、次に菅原研州先生への質問を読ませていただきます。「中世の曹洞宗においては授戒会を通して民衆に広く浸透したようですが、近世や近代においても授戒というのは曹洞宗においての重要な布教のツールとして機能していたのでしょうか。また、他宗派においては、授戒会というものをどのように捉えていたのでしょうか」よろしく願います。

菅原先生：曹洞宗における授戒会について、中世では、資料的な面から現在の愛知県あるいは、静岡県のあたりで行われていたことが分かります。もちろん、淵源をたどれば、太祖さまの所からかなり行われていたということは、臨済宗関係の文献でもそのように残っているので、宗門における授戒会が布教化の根本であることは、歴史的にも間違いないと思います。むしろ坐禅会の記録などは、ほとんど残っておりません。江戸時代の有名な学僧たちの記録を見ましても、大乘寺の卍山禪師が客殿を使った坐禅を行ったことや、面山禪師の本師・損翁宗益禪師が坐禅会を行った記録がありますが、これらが非常に珍しいくらいです。よって、御授戒が中心だったのであろうと思います。また、特に江戸時代は戒師として名が売れた方が一回呼ばれると、次から次へ呼ばれるという状況が一般的だったようで、面山禪師は研究や著述等に忙しかったと思います。やはり十数回の戒師をされていますし、雲樞泰禪師は、現代でいうところの、中部地方から近畿地方にかけて名前が通ったようで、二、三年ばかり戒師で引っ張りだこになったせいか、体調を崩してしまい、本人は拝請を受けなくなったことが年譜に残っているほどです。授戒会は実際に、相当数行われ、当時の宗門寺院の貨幣経済的な面を部分的には支えていたであろうと思います。この辺は、寺院の収入や支出といった経済的な記録で裏付けられれば、緻密に研究できるのかもしれない。しかし、少なくとも授戒会作法書の面からは、先に申し上げたような意義があります。ただし、明治に入り、各大家等からの寄進が無くなった段階で、宗門寺院がどのように生計を立てるかについては、当時の御住職方はかなり頭

を悩ませたと思います。そのため、従来の成功体験も含めて、授戒会により依存といいますか、重視した状況はあると思います。私の寺院は宮城県の中のにあります。明治に入ってすぐくらい、面山禪師が修行した仙台泰心院の御住職を戒師に招いて授戒会を行ったそうです。江戸時代までの檀家さんとの関係は、寺請制度によって賛否様々あったと思いますが、時代が変わり、そこからどうやって教化を行っていくかを探る状況で、授戒会が熱心に行われたものと思います。

山口老師：はい、ありがとうございます。それでは尾崎正善先生への質問ですが、二つ関係しておりますので、続けて読ませていただきます。「移転賛成名簿に名前が挙がっておりました三浦梧楼、あるいは雨宮敬次郎、大倉喜八郎などの方々は元来曹洞宗の檀家または、信徒だったのでしょうか。つまり信仰心がはじめにあって協力したのでしょうか。これに関連しまして、移転にかかわる金銭、お金のマネージメントはこういった方々、財界人が細かく石川禪師にアドバイスしたと考えてよろしいのでしょうか」よろしくお願いいたします。

尾崎先生：質問の答えを考えているのですが、三浦梧楼は居士です。居士号は、観樹居士ですが、曹洞宗の檀家さんではなかったと思います。それから雨宮家に関しては現在日蓮宗です。雨宮敬次郎は甲武鉄道、今の中央線ですけれども、それをまず敷くのですが、それは出身の山梨から東京へということ。山梨は、曹洞宗の寺院も多いですけれども、身延山の地で日蓮宗の寺院も多いので、その関係だと思えます。それから大倉喜八郎は、調べてないのではっきりわかりません。すくなくとも三浦梧楼に関しては、先ほどもお話しましたけれども、両本山の分離問題というのが明治二十年代に起こります。その時の仲介役を務めたのが三浦梧楼であったということでもあります。先ほど、居士号も持っていたといいましたが、仏教に関しては非常に造詣が深く、そういう関係でいろいろな人脈

があったということです。ですから、曹洞宗に限らずということで、石川禅師とも個人的に親交のあった人だと思えます。

それから雨宮さんに関しては、鉄道関係の繋がりです。御移転にあたっての新聞記事には、鶴見は将来川崎大師のようになる、という記述がございました。御移転に関しては、この鶴見だけではなくて松戸ですとか、八王子、それから真偽の方はよくわかりませんが藤沢あたりが候補地となり、土地を提供するという話がありました。本山が移ってくるということは人が集まってくる、人が集まってくるということは経済的に潤うことに繋がります。また、人を運ぶために鉄道が必要ということで、鉄道の発達と深く関わります。東京の場合を見ると、成田山の成田線が有名ですし、それから小田急という江の島とそれから箱根に敷く。秩父鉄道も秩父の札所と関係します。鉄道は、観光地、それから寺院、大師線は典型ですけども、それらと関係が深い。東京の人たちをこの鶴見につれてくるということになれば、移動手段としての鉄道が必要、鉄道を敷くのは雨宮さん、そういう関係があったのではないかなということです。

全員を調べていないので正確にはわかりませんが、信徒名簿は少なくともお寺の檀家さんであるということが確認できています。役員である信徒さんに関しては、全部曹洞宗の檀家さんです。しかし、この賛成名簿にいうと、御移転に賛成した方が必ずしも曹洞宗の檀家さんであったかというのはいわかりません。逆にいうと檀家さんでない人の方が多いのではないかと考えております。

それから先ほど来申しますように、経済的な関係から生まれたものもあると思います。石川禅師は、先ほど川口先生が仰っていたように実務に長けていたということで、外部からのアドバイスは受けたかもしれないけれども、石川禅師自身の考えが強かったのではないかと思えます。その考えに対して、経済界の人がサポートするという、相互補完的に進めていったのではないかなと、推測ですけども、そういう風に思います。

川口先生…私、いろいろなことを聞いていて、以前の研究を思い出したのですが、石川禪師は總持寺の監院さんですね。当時の兩本山には、監院が二人いらっしやった。御山の監院と東京出張所の監院です。御山の監院というのは、本山で雲納教育に尽くしており、行政面とか事務的なことはやらない。東京にある出張所、永平寺でいうと長谷寺ですが、その監院が政府とか地方行政と、また總持寺とか、対外的な行政の実務を行っていました。

總持寺の出張所はどこにあったのでしょうか。上野不忍池の近くの慶安寺、いまは杉並の方へ移りましたけれども、慶安寺が出張所、東京宿所で独住一世の奕堂禪師も江戸、東京へ来たときはそこで宿泊していたかと思いますが、違いますか。そのため、出張所監院の方が、本山監院より実務上は強かったようですね。そうすると、總持寺の出張所監院は誰がやっていたのか調べなくてはなりません。独住になってからも慶安寺の住職は、安達達淳がやっていた。安達達淳は『曹洞宗革新論』を書いた人とも言われていますが不詳です。ただ、発行は安達達淳かもしれないけれども、そこら辺りをもう少し、調べなければなりませんね。石川禪師が監院としてみんなやってきたことになるかもしれません。これらは、今後の課題ですけれども、尾崎先生そのところはわかりますか。

山口老師…石川禪師は四四歳で御山の監院をしてそのあと出張所の監院をしているのです。

尾崎先生…そのことに関しましては、年表にもありますように、四四歳で監院になるのですが、そのあと体調を崩します。明治二十五年に「三月、宗門紛擾。能山改革のこと」とありますが、はっきり申し上げますと、この時に能本山の分離運動を行います。その結果、宗門から監院を辞任させられ、その後で東京出張所の監院を拜命するといふことになるのです。

ですから、内紛でトラブル起こしたにも関わらず、実務的には東京の監院に収まるということになり、そのあとに豪徳寺の住職となるのです。ですから、總持寺が火災に遭った時点では、總持寺の東京出張所監院として実務を担当していました。そのあと西有禪師より、また本山の監院に戻されるわけです。このように、能本山と東京出張所の監院を行き来する形で、配役にあたっていたということになります。

川口先生…両本山分離問題の時は、石川禪師が能本山の監院だったですね。両方の監院を勤めるということは、御山の雲納教育を勤め、東京では、それこそ対世間の事をやることとなり、大変だったと思います。両方ともやったということは両方ともに長けた人だったということですね。永平寺でも両方の監院を勤めている方はいますが、なしろ実務上は東京出張所監院の方が力があつたようですね。そんなところで、石川禪師は両方勤めているのだからよっぽどの力があつた方とおもわれます。

尾崎先生…改めて申しますが、先ほど菅原先生からご指摘を受けたのですが、最乗寺の住職の就任後、明治三十二年に宗務局の総務を拜命しています。この総務は、現在でいうと、宗務総長ということでありまして、宗門の方でない役員が分からないかもしれませんが、宗務行政のトップです。本山は、監院さんが事務を管理している。全国の曹洞宗寺院を統括する組織として、今は宗務庁というのがありますが、そのトップです。ということ、後になりますけれども、本山の禪師としてトップであり、宗務行政のトップも務めた、そういう方だったということ、です。

山口老師…はい、お話をまだまだ尽きません。特に川口先生、名古屋御出身ということで、熱血的に語っていただきま

したけれども、この後ほかの質問にお答えしようかなと思っただけですが、もう時間もございませんので、みなさん先生方へ帰るときに聞いていただければ応じていただけると思いますので、そのようにお願いいたします。

最後になりましたが、本山からのPRで、この後、總持寺としての石川禅師に関するものでございますが、大正九年の十一月十六日に亡くなられていますので、本当はその日が御正當ですが、本山ではいつも御移転記念として十一月五日を中心に行事を行っております。今年の石川禅師の百回忌は十一月二日から五日にかけての四日間、執り行わせていただきます。そのうちの十一月三日は休日で、毎年つるみ夢広場という、地元の方と一体となった大フェスティバルをやっておりますので、その日はそちらで石川禅師への顕彰を行います。特に地元、鶴見神社の御神輿、それから相模原からの御輿、神輿二基を繰り出して、そして、あの移転行列を再現しようという企てもございますので、どうか皆様ご覧になり、あるいはお参りいただきたいと思っております。

また本山としましては、記念事業としましては十月十日から一ヶ月間、三松閣の一階で禅師さまの遺品展を行います。名古屋は空襲でほとんど焼けてしまいましたので、禅師さまの関係あるものはほとんど残っておりませんので、本山にあるものと、滋賀県の青龍寺さんが所蔵しているばかりでございますが、それを整理して遺品展みたいな形で皆様に見ていただけたらと思っております。また、地元の鶴見文化協会の方々によるパネル展、あるいは華道展、献茶展、たくさんさんの催しを、石川禅師を称えるための行事を考えておりますので、ご覧いただきたいと思っております。あと、本山としましては先ほど来先生方から話が挙がっております『戒会指南記』を再び発刊させていただきます。これをまとめたものを一冊。本を上梓させていただきます。御所望の方は本山売店に置きますのでお求めください。ちよっと端折ってしまいましたけれども、時間が来ておりますので、以上を持ちましてパネルディスカッションと質疑応答の時間を終わらせていただきます。どうも先生方ありがとうございます。